

◆講座の概要

5月11日から6月8日にかけて、龍谷大学世界仏教文化研究センター提供講座「聖地をめぐる—説話・密教・夢—」が、龍谷大学深草学舎紫光館で開催された。「講座概要」にも記されていた通り「聖地」と総称される「場」の特質を、歴史学、文学、心理学、および哲学の側面から明らかにすることが、本講座の目的であった。講座は、全5回の講義から構成され、第1・2回の講義を本センターリサーチ・アシスタントの亀山隆彦、第3回講義を同じくリサーチ・アシスタントの李曼寧、第4・5回講義を博士研究員の唐澤太輔が担当した。各講義の内容がいかなるものであったかは、以下に述べる通りである。

◆各講義の内容

第1回講義「聖地の概念」（講師：亀山隆彦）

タイトルの通り、「聖地」の概念をめぐる総論的な内容の講義であった。そもそも「聖地」が何を意味して、具体的にどのような場を指し示しているか。同概念の定義をめぐる、実に多種多様な解説ないし議論が積み重ねられてきたことは周知の事実だが、それら解説・議論を総括し、講座全体に通底する「聖地」理解を解明することが、本講義の目的であったと思われる。その結論について簡単に述べておくと、聖地とそれ以外の場所を分かち要素として、講師は「記憶」の存在を挙げる。場所に込められた記憶、さらに詳しくいえば、聖地＝聖なる場所と緊密に結びついた聖なる出来事、聖なる時間の記憶である。「物語」の形をとって与えられるこのような記憶の有無により、聖地とそれ以外の場所は分け隔てられる。聖なる時間の記憶と結びつくことにより、物理的に、またその意義が変容した空間が聖地であると、講師は結論付ける。

加えて、そのような意味で、聖地は純粹な「トポス」（場所）とはみなしえない。文学者・哲学者ミハイル・バフチンが提案した概念を比喩的に用いるなら、それは、むしろクロノトポス（時空間）的な存在と理解される、とも主張された。

第2回講義「日本の聖地をめぐる」（講師：亀山隆彦）

第一回目の講義で明らかにされた、物語の形をとって与えられる聖なる出来事・時間の記憶と聖地の密接な結びつき、さらにクロノトポス（時空間）といった概念を手がかりに、日本の聖地の分析が試みられた。具体的には、日本を代表する「霊地」と評される熊野と立山を例に、おのおの聖地として、いかなる特色を持ち、その開創に関してどのような物語を伝えているか、検討が為された。

第一に熊野については、もともとイザナミノミコトが葬られた墓所、黄泉の国の入り口とみされていたが、後に本地垂迹・神仏習合文化の影響で、娑

婆世界の浄土と語られるようになり、避けるべき他界から、積極的に赴くべき聖地へと変容したと指摘できる。同じく立山についても、地獄であると同時に、極楽浄土でもあると語られることで、その情景は両義的な価値を持つようになったと考えられる。つまり、熊野や立山のような日本の霊地の場合も、伝承・伝説・縁起等の「物語」と、教会・寺院・森・川・谷といった「マーカー」、つまり時間と空間は密接に結びついているといえる。日本を代表する聖地も、「時空間」(クロノトポス)的な存在とみなされるのである。

第3回講義「仏教説話に見る異色な聖地—二度と訪ねられぬ場所—」 (講師：李曼寧)

本講義は、特に、言語学・文学の角度から「聖」と「聖地」の意味の歴史の変遷を辿った上で、仏教説話に見られる特別な「聖地」を紹介した。

「聖」という漢字は「耳」「口」「呈」から構成され、「耳に入ったことをそのまま口から出せる」「見聞したものを完全に理解・把握し呈することができる」という原義から、中国においては、もともと「万知万能」の「神仙」特に、人類を創った功德を持っている女神女媧のような至高の存在にしか使わなかった。そして、時代が下り、儒教の始祖孔子が「聖人」と尊ばれたことによって、「聖」という文字は、神仏のものではなくなった。日本においては、徳の高い人や徳の高い僧などの意を経て乞食僧を指すことにもなった。

漢字「聖」の神聖性の降格と汎用化とともに、「聖地」の意味も段々変わることになった。例えば、神仏とゆかりがある、または神聖な力を有する宗教的聖地、あるいは宗教とは特に関係なくとも特別・憧れ・最適・最高と認識される普遍的聖地がある。また聖地の認識の範囲によって社会的・集团的・個人的な区別がある。つまり「聖地」という言葉は、多義多層化したのである。

講義の最後に、実例として、鴨長明の『発心集』巻四第一話に見える数種類の聖地——熊野三山という普遍的に認識された仏教聖地、登場人物の隠居僧が転々した後ようやく定住するようになった『法華経』の力によっての、彼に最適の修行聖地、八十数年も世間にバレなかったが、命が危ない義叡の至心祈願に応じて一度だけ開放された聖地——を紹介した。

第4回講義「聖地の哲学①—夢と聖地—」(講師：唐澤太輔)

古来、夢と仏教との間には密接な関係がある。講義ではまず、親鸞、泰澄、一遍などが聖地において見た「夢告」について解説が行われた。次に、このような夢告を受ける場所として二種類の聖地が定義された。一つは、人間の手によって作られた聖なる場所(六角堂、証誠殿など)、もう一つは、自然界に存在する聖空間(熊野那智山など)である。そして、この聖地における「ヒエロファニー(聖なるものの現れ)」について、鎌田東二の言説や宮沢賢治の詩を引用して解説が行われた。

聖地とは、いわば、この世とあの世、生と死との「通路(パサーージュ)」であるが、その特徴を最も良く表していると思われる、自然界に存在する聖空

間＝熊野・那智山について、三人の人物（文覚上人、小栗判官、南方熊楠）を取り上げて比較検討がなされた。三者に共通する事柄は、人生において徹底的な挫折を経験した後、聖地熊野へ向かい、そこで死を経験し、その後見事に復活した点である。結局三人とも聖地には留まることはなく、暫くして立ち去っている。ここで、講師は「三名はなぜ聖地熊野を去ったのか？」と疑問を呈した。徹底的な挫折を経験した三名が、「エネルギー交換所」たる聖地へ向かったというのであれば、そこを去った理由もあるはずである。この疑問を受講生各々が考えてくることを次回への課題とした。

第5回講義「聖地の哲学②—彼らはなぜそこを去ったのか—」

（講師：唐澤太輔）

人は聖地に永遠には留まることはできない。なぜ人は聖地から去るのかについて、「無」と「不安」をキーワードに解説がなされた。

まず、聖地における開放性と閉鎖性の並存、時間観念や自他の区別の曖昧さなどが説明された。我々が普通に考えている「制限」や「区別」などとも簡単に吹き飛ばす場が聖地なのである。次に、そのような聖地のさらに先にある異界あるいは根源的な場には、一体何があるかについて、キルケゴールの『不安の概念』の一説をひきつつ講義が行われた。キルケゴールは、そこには「無」があり、そしてその「無」は人間に根源的な「不安」を呼び起こさせると述べている。人間がその最大の特徴とも言える「自己意識」（自他を区別する機能）をもってしまった以上、この「無への不安」は必ず訪れる。「人間であること」を完全に放棄しない限り、聖地のさらに先へは行けないのである。文覚上人・小栗判官・南方熊楠も、結局は、「無への不安」に逆らうことはできず、「人間であること」を放棄できなかった。そして山を下りたのである。このように、根源的な場へと溶け込むことができず、世俗へと再び下った三人は、「社会復帰」したとも言えるし「墮落した」とも言える。

講師は最後に、「聖地という現実世界と根源的な場とのあわいで二者択一（異界へのダイブか世俗への再シフト）が迫られたとき、我々が本当に願うのはどちらであろうか」と問いかけた。

◆全5回の講義を通じて

本講座は、世界仏教文化研究センター初の連続公開講座であった。40名の募集に対し、33名の受講者が集まった。全5回を通じて、受講生はほとんど欠席することなく、毎回非常に熱心に講義に参加していた。講義中もしくは講義後に、受講生から質問が出ることもあり、講師もそれらに真摯に答える努力をした。また受講生からは、「この講座を受講してから伊勢や熊野を行ったら、聖地に対する理解がより深まると思う」などの意見も聞かれた。三名の講師たちは、事前に綿密な準備を行い、また詳細なレジュメやパワーポイントなどを用いて講義を行った。その結果、わずか5回ながらも、大変密度の濃い時間を受講生に提供することができた。

以上